

弱虫を支えた言葉（後編）

笛峰はやお

支えた言葉 その五・結果にとらわれるから、不安になる。
結果は神が決めるもの、自分にできることは、最善の努力を尽くすことだけだ。
前編に書いたように、大変気の弱い私が教員という人間相手の仕事に就いてしまった。教員をして困ったのは、生徒や同僚教師の問題行動を注意しなければならないことだった。説得を試みて、もし相手がこちらの忠告を無視してきたら、自分の指導力の無さが露呈してしまった。特に他の生徒の目の前で、ある生徒を注意した場合、生徒は自分の面子を守るために猛反発してくること

こういう、勝つか負けるかのやりとりが、私は苦手で、苦痛たつた。だが、ある日気が付いた；人間は自由意志の動物だ、だから相手の行動をこちらがコントロールしようとするのは、もともと無理な話なのだ。行動を改めよるか、どうかを決めるのは、あくまでも相手の人間だ。人間は、自分が変わったから、行動を変えるのだ。自分にできることは、相手が変わる気になるように、最後を尽くすことだけだ。そう思つたら気が楽になつた。それで静かに相手に道理を説いて、たとえ相手がその場で改めでなくても、話はそれで終わりにすることにした。

時めはしそうに、それは仕方がないことだ；結果は、こちらが左右できるものではないのだから。しかしそ時めはしそうに、私は3年後、5年後、10年後の相手に向かい、言葉をかけるようにしている。「今はわからなかつても、私も3年後、5年後、10年後の相手に向かい、言葉をかけるようにしている。」

いまだの入し悪敗付し い暮外 聖人でない
始つの時つこ続さやけ好そつらでない
めて飲がてのけな、ばきのたしは
るしみ苦い人るど頭必で中人でない
。ば会痛たは。をのず社のにいい
やらだで。、
りくかあ組職
玉すらつ合場
にる、たでの
挙と楽。年労
げ決し同に働
らまみじ何組
れつに信回合
るてし念かの
の〇てを懇幹
はさ行共親部
、んく有会で
そがのすを、
の誰だる持私
場かが仲つも
にの、間のそ
い悪宴1だの
な口会5が組
いをが人、合
、言始ほそに
し悪敗付し い暮外 聖人でない
始つの時つこ続さやけ好そつらでない
めて飲がてのけな、ばきのたしは
るしみ苦い人るど頭必で中人でない
。ば会痛たは。をのず社のにいい
やらだで。、
りくかあ組職
玉すらつ合場
にる、たでの
挙と楽。年労
げ決し同に働
らまみじ何組
れつに信回合
るてし念かの
の〇てを懇幹
はさ行共親部
、んく有会で
そがのすを、
の誰だる持私
場かが仲つも
にの、間のそ
い悪宴1だの
な口会5が組
いをが人、合
、言始ほそに
はる支
えられた言葉
あその六・他
人のはやめよ
う。口やう不
い平うを言
きいあ暮
いらにし未
て來い

り結るかあを 呪してこセわかてはが て
、果とつる掲勉樂縛さ、そスれししま何こく
挑にいた。げ強しかえ「ががてくまるかれだ
戦とう時たてでむらす結果、そいなつ。大はさ
するう、しれれときばはどり内実なつに因援だのチし
われの人生をプロセスを無意。善腹、喜まてな援でンと
ありしれし応「レうで。
方や果力あだ最と、喜まてな援でンと
仕に結努での「うあてわを。ニヤより
で。善腹、喜まてな援でンと
をつとやれ。善腹、喜まてな援でンと
をすてし精、善腹、喜まてな援でンと
べきて進仕、善腹、喜まてな援でンと
をきたそを事、善腹、喜まてな援でンと
で努のすで、善腹、喜まてな援でンと
には力目るあすなが標のれ
るい全がは、
や。部達良一
りそ無成いつ
方れ駄でこの
ではにきと目
あ、ななで標

とけ てこもと A 悪も 推す自合う界幻努つく感い とは こを 会い つさい悪し同
んっだ B ちち、さー口に何測、身わに限想力てるじて私がす〇とどーでるそたざざ口く業
でこがさらろ急ん敵か付度し結はぬちのないこた、が理つさはん〇悪〇れ。め知の暴の
もう、んはんにがのらき忠た果そ、やのひどれと時そ言解かんななさ口さに いら独露誰
ない人が A 、 A 、敵避合告。との根ほ旧たしばだ、のおでりはいにんをん、
いるか嫌さそんが A 、 A 、敵避合告。との根ほ旧たしばだ、のおでりはいにんをん、
人。らいんが 分味しのて し普拠や家るな、手人うきまーんこ、まを私
なー人なが と方たはも てラのとのこくそとつがとなた瞬だき宴く、は
んね気だけ 本當じと 他イ無育跡とてのいと自しか悪以か下会し間そ
だえをきの じと けま 人ドいて取がも人うり分たつ口外らろで立違う
つね得だな 友情や う に高らりで、にこ早よこたにそ。しはてつや
てえるかわけ に思 い てつや 悪見いれ息き「追といりとよ戻う たもててつ
ー、たらけ に信 い う 口合プた子る自いだ解恵はうつな つとい て
と〇めだで か〇に は にうラとに。分つっ消ま、だて顔 てと 他
か〇に は 言 は はほイイ生人がきた法れ自。いで 、樂に
言さ、な は けどドうまづあ追。はて分 る口 そい て
つんこく、は な はで はで け口のを。れでいいラそおが 。を
てのの は が が彼、 か私 を力身そ、につ越イのりラ 彼閉 分話
、息手た は が 嫌あらは 見もにのま聞よすバ人、イ にじ あを こう言 。下
仲子法だ。 た は が 異や 無つ過るくりたルのこバ はた なしつ。あろ
間さを單なう いた てて が だくけ程でと上めの悪ちル 私が たよ。たよ
にん使にぜ心 い た て て し、 でお、だに悪口ら視 の、 がう 時て
引っう共な理 い と と た努し身殿彼「こ口をがす 言数 偉よ 、暮
きて人通らだ 知ば つと も力かの様はとちさ言嫉る つ分 く。 私らし
入、は し、 と つと のもも丈のそいらえい妬人 た後 な他 は宴て
とせ彼によのうが言まをが こに こに 人 は思ははか

支えた言葉その七・「人にどう思われるか」は、自分でコントロールできない他律的世界。「自分が人をどう思うか」は自分でコントロールできる自律的世界。自律的 세계를大切に。

らのし　のお婚がて　へ自　れ話そ本時り　をがだを必と話言あしがる時思　は一か人々
な間てま方嫁相あしだ評分私よ題う當に批よ貫取かしずえだいなて出ののわ　一、喜一たの
いに、たにさ手るまが価のたうにでに駆判くいれらたいど。をたい会か一れ人こ一をち中
と何よ私はんか。つ、一こちとしはあけし考てな万らるん有すはるつが入るにの憂氣もに
いかうのほのらたてそをとはしてあなたつてえ生く人、。な象るそ数た、一かど一しに少は
う溝や友と実など、う意を、ているたけいてきなの今そ選無この万人あやう言てしな
。のく人ん家ぜえこい識真一生るまのてるみよる氣度う択象と人々い一と思だいてか自
よ転男どとかばちうし剣世きにいた助人よう。にはいをのがたのやま世ほわ。るいら分
う勤性寄は敬私ら大てに間るす。めけ々うと一いまうし人でち人こい間ぼれ
なではり頻遠のに切生考ののぎ彼をよの。す世らた人よ々き全々れな一同る
も自、つ繁さ知冷なきえ目はなら思う中ある間れ他にう全る員一かのとじか
の宅十かにれ人た人れて一馬いはつとでな人一よのものが員だにとらだはと一
がに年な行てのいたばいで鹿。たてす、たをのう人気、のろ氣定出。考と
出戻以いきしあ態ちよては馬そだ批るあを封目と々に良心うに義会私具えい
来つ上の來まる度でいくな鹿の一判人な遠殺をしの入く証か入でう流体てう
てて仕でをつ女をされくしよ面をがた目す氣た氣ら思を?らき人に的よ言
い来事、して性取える、いう白し何がにるにらにれわ氣それる々定にい葉
てたで淋て、はる、一「こないて人助見こす、いよなにれるだ、義誰だは
、た九しい息、よ何大こと人かいいけてとるそらういしはよろ更すとろ、
悲ら州いる子息うか切のだ々らるるを、だこのれと人てとううにれ誰う一
し、にとのさ子にでな人。の一だだ必あと人な、がいてなか自ばを。世
く奥單いにんさなす人だ氣あろろ要ざははく別そたも行。分、指そ間
てさ身う、家んるれ々けになううと笑、身なののら無動さを一しうに
たん赴彼族のこ違のは入たかかしつ本動る選中、理やて見自ていど
まと任女は結とつ目、らを?たた心き。択にたな物、物分いうう

ある夜、その日も寝床に入つて自分の木枯らしのような境遇を嘆いていた時、浮かんできた考えがある。「たしかに今の状況は暗い。しかし、だからといつて、気持ちはまでも落ち込んで生きる必要はない」。

「そうだ、この状況はどうしようもないかも知れないが、少なくとも心の中でその不幸に支配される必要はないのだ。」私はその名案にうなづいた。目の前が少し明るくなつた。

それからは、心が沈んでいるのに気が付くと、心の中の不幸のスイッチを切つて、楽しい思いのスイッチを入れるようとした。切り替えは、そう簡単にはゆかないが、

支えた言葉その八・あなたが、今いる場所の寒々しさに耐えられないと、道は無いのではないか。
あなたのいる大切な場所の人間関係が冷え切つていい、誰も、一片のぬくもりも持ちはわせない、そんな人々に囲まれてしまつた時、どうしたらいいのだろうか？自分も同じ様に冷え切つたままで生きるしかないのであるか？たとえ決別してそこを脱出したとしても、また寒い集団に出会うだろう。そうして寒い集団から、別の寒い集団へとさまようだけだろう。
あなたが、どうしてもその寒々しさに耐えられないと言ふのなら、残された道は一つしかない。自らが小さなぬくもりとなつて、光と暖かみを発することだ。それが、最も頼らない、一番確実な方法ではないか。

多 こ あ し む 支
い す る い こ え た
。 人 こ メ れ た
は と 一 は 言 葉
、 が る 大 そ の
会 多 を 人 そ の
つ い 書 に そ の
て 。 け 関
み 逆 る し
る に 人 て
と 、 は の
人 ぞ 、 み
柄 ん 会 言
に ざ つ え
ど い て く
こ な み こ
か ま る と
問 一 と だ
題 ル 気 ろ
が 文 持 う
あ を の が
る 書 良 、
こ い い 礼
と て 人 儀
が よ で 正
人 柄 を 読

る の と 断 急 え 謝 一 一 た か ど る 支
こ き だ 、 絶 死 な こ る 向 悪 ま し 子 う 人 「 支
と つ か 極 の し い ん の こ い ま 大 供 し 人 と
の か ら ま 、 た 。 な が う の で 人 同 た 人 と
で け 私 り ぎ り そ 意 当 か は 、 同 士 し な い が
き を は な こ す ん 地 然 な 向 そ 士 な い が
る 作 提 い ち れ な の だ 仕 こ れ は い う 仲
人 ろ 案 。 な ば こ 張 「 掛 う が そ 、 だ た が
、 う す い 、 と り け の 長 う そ う そ う い う
そ 。 う そ こ 永 を 合 て 方 期 は の う か
の 憎 人 し と 遠 し い き だ に い う か
人 し 人 間 の に て を た か か わ か ち
こ そ そ の 器 連 便 し い 喧 嘩 だ な い 自
器 の 鎖 の 解 う い だ か な い 自
の 大 き い 連 な の う い こ う が な い 自
か い 人 だ か か な い 自
一 歩 か い 一 つ う ち た か な い 自
上 か へ ら い こ か な う 一 は
抜 き 和 い こ か な う 一 は
き 和 い し 方 あ
出 解 こ た が り に

け れ い の 配 だ す う う の る
る に こ 布 こ 。 に わ に 学 だ 力
元 人 は と に の 作 け 心 生 か も
気 の 止 ば も こ が 方 め か 当 と
が 方 め か 当 と 出 に た り て は 教
そ な う に は で そ な う に は で
て 注 く を は 教 员
く 目 な 苦 ま だ
る す つ に だ
。 れ て し け
ば し て 受 で
、 ま い け な
そ う と つ
れ そ う と つ
な 少 て セ
り し 気 く そ
の で が れ る
出 も 滅 な い
会 、 入 つ
い 受 け て
が 取 き て
あ 取 き て
り つ て の
、 て 、 人 ラ
続 く つ タ シ
の ラ い よ 数

私の数回ある。醉っ払いは、話をして分かる状態ではなが
宴會や飲み屋や路上で、醉っ払いにかられたことはなが
あるし、危険でもある。私はこういう酒癖の悪い人を
て相手にしてはいけない。醉っ払いを、まともな人間とし
ては、相手に分からせようとするのは無駄でなが
る。酔っ払いが喧嘩を売つてくるのにも3パターンがあ
る。一つは、親しい人で酒癖が悪い人の場合だ。アルコ
ールが入ると、脳内の成分が変わり、怒りっぽく喧嘩早
くなる人がいる。こういう人は、普段はいい人であつて暴
れても、酒が入つた途端に人が変わつたように攻撃的になつ
てしまう。樂しいはずの宴會の席で、突然怒りだして暴
れるのは、こういう人だ。なだめても大声で怒鳴り、威嚇
するのでは、周囲は困り果ててしまう。こういう時一番い
けないのは、酔っ払いの言う罵詈雑言をまともに受けて、
腹を立てて反撃することはだ。そうすると本当に取つ組み
合いの喧嘩になつてしまふ。もともと相手は正気ではな
いの喧嘩になつてしまふ。もともと相手は正気ではな
いの喧嘩になつてしまふ。

う。
支えた言葉十一・酔つ払いともめたら、素早く姿を消そ
宴會や飲み屋や路上で、酔つ払いにからまれたことが
私も数回ある。酔つ払いは、話をして分かる状態ではな
いので、その場で相手に分からせようとするのは無駄で
あるし、危険でもある。酔つ払いを、まともな人間とし
て相手にしてはいけない。私はこういう酒癖の悪い人を

たた待 しくもたく時笑シけれしにい
つままなしられ、いやてがく対客三ま話のタコをく手ば互な
はそてたついれ、るまなピキ入飲しだつうを罷イン付らは
じのいあたかなやもとがシたつんて。めのかに普なけ笑、喧にをのらなしめだばちをらか
め客たる。らいがのもらヤがてで威アのがけ嵌だにて顔も嘩醉激席ふたよはろ、ら待すら
ははら時飲帰。てだな返叩、きい張ルターにまろしくでと両つ高ででに
友酒流はみるそ私がマ事きやてたりコイ番行つうつる応も成払さ醉は対と職
好をれ者馴代！れも、マのはが横時散ト普だくて。こ。対と敗つせつ攻
的注染はーを腹そさせ代じてにのらルは。振しこくーし喧にたてた擊て
に文みあと避がうんわめあ座こすが、りまの絡およ嘩持はおふ材
のと言け立いなりたいりと。入飲をう場んかうをちずいり料
うでつるつうらに。ず、。以つみし。合でしと売込みてをが面
して私払てたて気、頭一ち最ど前て屋てだ、くいしつんで、し無
てにいべらんい、め相遣そを乱代初こ私自分で
いたが、らが入つたとマんい客てせ私そんみなま
その口調と話きてきんをさつそ厳ると頭に帰スし席
がけに文隣注出んてのし。言を私りナてし
てにしまくこつ平にのツ、た
て座しつ面う続ついがでし人でのつ
きつて白かけてう、ピカ連楽客払

し電手のて癖い相れおあでがかをしにらめ鳴い
。ら攻二げ聞、るりの
はいた酒しあ擊つるけこの散だ
じのいあたかなやもとがシたつんて。めのかに普なけ笑、喧にをのらなしめだばちをらか
め客たる。らいがのもらヤがてで威アのがけ嵌だにて顔も嘩醉激席ふたよはろ、ら待すら
ははら時飲帰。てだな返叩、きい張ルターにまろしくでと両つ高ででに
友酒流はみるそ私がマ事きやてたりコイ番行つうつる応も成払さ醉は対と職
好をれ者馴代！れも、マのはが横時散ト普だくて。こ。対と敗つせつ攻
的注染はーを腹そさせ代じてにのらルは。振しこくーし喧にたてた擊て
に文みあと避がうんわめあ座こすが、りまの絡およ嘩持はおふ材
のと言け立いなりたいりと。入飲をう場んかうをちずいり料
うでつるつうらに。ず、。以つみし。合でしと売込みてをが面
して私払てたて気、頭一ち最ど前て屋てだ、くいしつんで、し無
てにいべらんい、め相遣そを乱代初こ私自分で
いたが、らが入つたとマんい客てせ私そんみなま
その口調と話きてきんをさつそ厳ると頭に帰スし席
がけに文隣注出んてのし。言を私りナてし
てにしまくこつ平にのツ、た
て座しつ面う続ついがでし人でのつ
きつて白かけてう、ピカ連楽客払
しにらめ鳴い
。「俺がつ本、
席か人言
がそ立あはこ
そんたる言と
こないうを
帰はだま
ことを言
しのわに
つま罵せ受
たう倒てけ
かかにおて
なだたいは
？」
翌り、け
と日か興な
首そね奮い
をのたが。
か人な冷怒

だ書始と嫌ズだと方スヨはヨ支
んきめ自こ悪ルか口でトン原ジンえ
だ写る分んにズら論はコが稿めでた
んすこにな陷ルーし、ン整をても言
アこと言時ると、ていデつ書、書葉
イとだいに。日「醉イつイたか筆書き十
デ。聞は伸ばしにしたから」まシらねが始二
イとだいに。聞は伸ばしにしたから」まシらねが始二
アが湧いているうちに、筆が進むよう
れて、筆が進むようになじめ文もなる
て字書い、にき」

ちりいな店発のつとがこにてからやちかく一
だ、どをしが後た思、店ちをん?なあぎがけ人あ
。正と氣出始そでまい男主らオジくん立一て間ん
常ににるめも思ま、はがか!や□て結構だ。な。て○
なか掛べたそつで私ま騒ら」なは知構だ。な。て○
人くけき時もたさはだぎ手とい知構だ。な。て○
と、るだに間がつ「私には私かつてるか
し醉必つ、違、さ帰に気出の?てるか
てつ要た忘いあと店!態いいらをつやつて
対払はれだんを「をつ飛びに相手を來。な
応いなそ物つなをしはいんかた醉出で
しはいんかた醉出で
な、「な電。つとき続出しあんたでやつたな
い酒代時話「払つて金はのう飲は、振をに
ほに金はのう飲は、振をに。う飲は、振をに
がま後注り知ま。注いき文るてにら。るつて
いれ日文をつと文るてにら。るつて
いて持ししてもし。、△△を知らな
。」つたてるにたこ男返し。△△を知らな
逃いてう、か返うれを制した。△△を知らな
げる行ど何?答どは制した。△△を知らな
るのけん気」をんま止。△△を知らな
がでばのなをしはずし。△△を知らな
勝あい事く乱た放いた。△△を知らな
になしる知

ついには、昼間行き詰った部分の原稿が、夜中に目覚めて素敵な文章となつて浮かんでくるようさえなる。

路での格闘が、無意識的回路のスイッチを入れるのだ。だから、原稿は最初にどんなにくだらない物に思っても、まずは奮闘して書き上げなければならぬ。人生の悩みや苦難は、それにまともに向き合つて、胃や腸がねじれるくらいに苦悶して、解決策を探さなければならぬ。そういう格闘をしている人だけに、無意識的回路が働くのだ。

れ一は・ま吸 いな一ブコそ私
ば回の浮不だわそる万の代れはそ
、だ恍か健時せう楽た七中とで、の
こけ惚ば康々てやしひ千古同、そ喪
れ」感ずさ襲くみに円車じ當の失
まのば、・つれてを、くを月時喪感
で言か食面で、二得「ら、賦欲失に
苦葉り後倒きそヶたおいあでし感勝
労にがのくたし月 前のる買かをつ
しぐ、タさ。たほ
たら甘バさそらど やは賦度こたのめ
禁ぐくコとうも切
煙らさのいいうり
がすさうううい抜
一るやつ、時いけ
瞬。きと十はかた
にだかり分、らがい
しがけとのター、
てし九バと「
瓦そくたのコい今
解のるあマのつ日
す誘。のイあた一
るい「十ナの誘本
こにた分ス臭惑だ
と乗だの面さがけ

るないなコ期だ喪獲う 状有をえそだよ晚
。いかつをにろ失得一だをつ書てのがうまそは校。三
の「て吸わう感しつが無たいい時、ででれ禁で私
に「くつたかかたの、駄がてた期「良
一るてり。ら喫根やに、い。を「良い仕事
日。い、こ来煙深がしせるそれに眠く
など数ここの強ら淋い欲自はか、以後は
い本こをかのしう求分なくタバコ、
つだで前つ誘さ「のはら通りコ、
たけ一にた惑だ楽存、なり越が授業目
さに本す。のつし在再い越が授業目
さ抑だる特方たいにびと頑
やえけとにが。生氣タ
きて吸、、精活がバ
がいつ吸誰な神習付コ
頭れたいかか的慣いを
のばつたがな禁「た吸
中、てくうか断を。い
に吸、てまし症、そた
充ついたそつ状失れく
満ていまうことうはな
しもでらにく言と、る
て害はなタ、えい一、
くはなくバ長るう旦も

私学た校
3年生を
月生を
一日の卒業式が済むと、残りの三月
ほとんと無くなつた。その時を
選んで、い

支えた言葉一六すばらしいアイデイアが浮かぶ瞬間を大切にしよう。そういう瞬間は、散歩しているリズムや、大自然の中の散策、良く準備された質の高い講演を聞いている時などに訪れる。講演を聞くということは、その講演から何かが学べるはもちろんだが、それ以外の効果もあると思う。良質の、よく準備された講演に耳を傾けていると、脳の無意識的回路が活性化され、分野を越えてすばらしいアイデイアが浮かんでくることがある。もちろんそうなるためには、講演が耳障りな言いほどみ（フイラー）や修正や論理的混乱のない、整然としたものである必要があるが。関係の無い分野の講演を聞いていて、ふと自分の専門分野の新アイデイアを思い付いたりする。だから、私は自分が講演をする時でも、耳を傾ける価値があると思う。よく準備して整然と話す方を心がける。

ち健るかはととル白で きしいから格ど 最後
この康か疑無言いのでも帽た倒人つし私とれ弱後に
の忍なら間かわう男も他子。さたたてはいだ氣に
よ耐人、自分につけ激のい人取れち。生、うけで
う力た思たた励子いのり なが人き弱もう根
なをち回持は思うし方よと、帽の い道生て氣のら暗
想つ、毎本いも正きをい よのをいではやで
書いを強當い、反く奪出 う真道け根、ま心
きる病何一あでつ必書に にん路る暗根し配
なだ気の 人人少んあて然い 道中によで本く性
がろの ちの年なるほ性たのをたう心的思の
らう苦 ち子の馬。しがよ 端大とに配につ私
か痛見 渡かかえて生きる人たは供瞳鹿「いいう
ことをがな にんきつれと私に は容にのは殴！まに
渡してみると、私よ にん「てたいかたと
かかる人たは がる分いせシ「一
よ がる分いせシ「一
かた。通のに「一 や腕ム

内にイをしは低の訓 てん歩る康
回舉テこ踏た、レ能が私來やいと、進オ
路げしれみ雑あべ力含たやりて、のたシは入音クルをまちすといだば一
活ウヨ門れかまの秘れがい何るんかキ
性オン外たらで刺めて人のかよだりン
化一や漢い自も激てい生だにうんでグ
ヘキカのも分刺にいるで。集に雑なや
のント憶のを激幻る。出 中な念くス
入グリ測だ遠に惑。私会しるが、口
りやツに。ざ過さ日たつして。消思一
口講クすけぎれ頃ちたてずて私の体
で演のぎはと式な、日た脳験
な同文いも潤々ち内に
ない様にがついをはのは良え、つグ
か、よ、とそる茶道、と浪、思
と思う。うな座潤は費外考ど
いはうい拌やいなしか回れ
深らてら路も無思いるつ、尽
自ど禪由は、索。て無藏
な、メにそ刺く尽の
脳先デ足う激る藏教
いばにい健

りいタれ 思がのいり
で気したおいいでるも
は分弾私かでたは。大
なにきのし、らな自き
かな語声なこ、い分な
つつりは話の少。の苦
たてで、だ回しそ出難
とい歌7が想はれ会の
今るう0、をなでつ中
で。と才子書ぐもたを
はシ一を供いさ、苦生
思ス若すのてめ私労き
うタくぎ頃みにとなて
。一てて一たな同ん来
ボ甘も女。るじてた
一いつの かよ、人
おイ声や声 もう自が
わも一やみ しに慢世
り、だかた れ小での
悪とさい な心き中
い言を一 いさるに
こわ保と 。にほは
とれち撃 そ悩どざ
ばて、揄 んむのら
かいギさ な人もに